



ところを。」

「それとも、なかまどうしで、けんかしたのかもしれないな。」

「グエツ、グエツ、グエツ」

サギは、キズが痛むのか、羽のなかに、長い首をつっこんで、なんども鳴いた。

「おい、なんとかして、こいつの傷、なおしてやりたいな。」

「でも、村へつれていったら、たいへんだぞ。」

「そうだ。ほら、いつかのツルみたいに、食べられてしまうぞ。」

おれたちは、みんなで、どうしたものかと、首をかき上げて考えこんだ。

去年の冬も、山で、一羽のベニツルがつかまった。飛んでいるのを、うまく狩人のトラが弓で射おとしたのだ。まあ、トラのほかは、空高く飛んでいる鳥を射おとせるような、弓のうまい狩人は村にはいない。トラは狩人の隊長だ。さっそく、村じゅうが集まって、そのツルを神さまにおそなえしたあと、みんなでわけあって食べた。

とにかく、ツルなんて、めったにとれないめずらしい鳥だ。だが、なにしろたった一羽を村ぜんたいの者でたべるんだから、ひとりがたべる量は、スズメ一羽にもあたらない。これじゃ、どんな味だか、さっぱりわかったもんじゃない。おれが食ったのは、残念ながら、どっか腹わたのあたりで、なんだかいい味がして、ろくにたべもしないで、おれは、はきだしちまった。でも、村長やノロさまは、すぐくうまいといって、なんとかして、またつ



やがて、向こうの方からノロさまが、ゆっくりとした足どりで、あらわれた。

まじない師ノロ

村長の家の隣には、ノロとよぶ、まじない師のばあさまが住んでいる。このばあさまは、この世のなかにいる、いろいろな神さまや悪魔と、いつでも自由につきあうことができる。

ノロさまの話だと、朝は日の神さまが東の方からのはってきて、夜になると西の方へ沈んでしまう。そのかわりに、月の神さまが西の方からのほ

こたえる。

そら きた。

そら 引け。

おそれをしらぬ 狩人たちだ。

かこまれた。

みつかった。

こうなりゃ みんな

おそれをしらぬ 狩人たちに、

とりこに なろう。

なろう なろう。

おいらの毛皮は

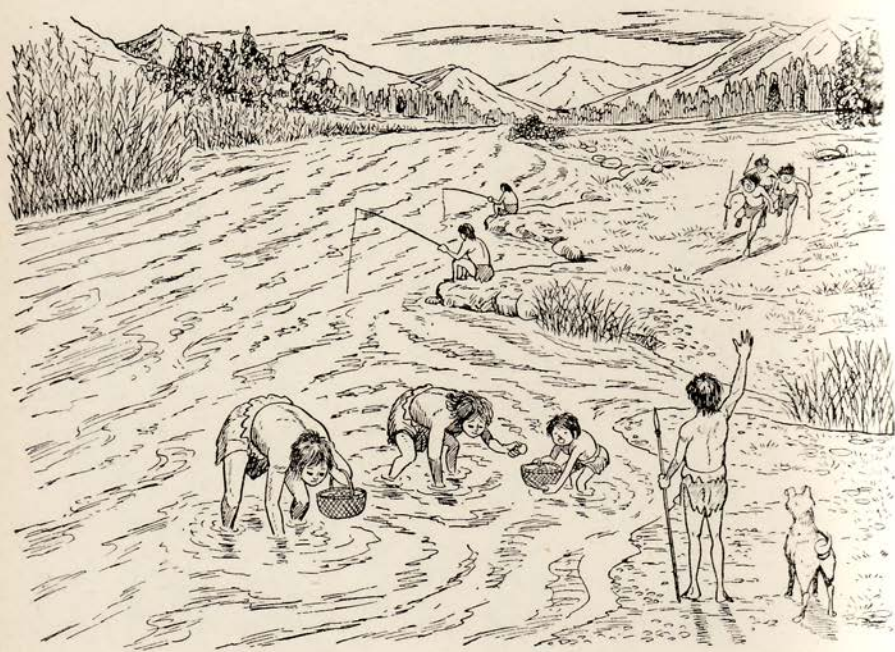
すばらしいぞ。

おいらの肉は

とても うまいぞ。

そんなことをさげびながら、とうとう五人は鹿の頭をかかえて、輪のなかに、うずくまってしまふ。そこで輪を作った狩人たちは、いっせいに、エイ、エイ、オウ、と、歓声をあげるのだ。これで「狩りの踊り」は終わる。





茂みで、そいつは、まるで居眠りでもしているように、じっと動かないでいるのだ。

「ようし。」

おれは、そっと近づいた。やつらは、とにかく音には敏感だ。だから、ほんのちょっとした音でも、すばやく感じとって逃げる。

おれは、顔を近づけて、のぞきこんだ。すごい。こんな大きなやつは、春さきは、深川にだってめったにいない。おれは、胸のなかがわくわくしてきた。

フナのやつが居眠りしている間に、すばやく手づかみでつかまえる。おれは用心深く、両方の手を、そっと水のなかにさしこむと、いっきに、ぎゅっと両手をあわせた。

ピシッ

おれの手は、驚いてピンとはねた大きなフナのからだを、むんずとつかんだ。つかんだがさいご、はなさない。水からでたフナは、口をバクバクさせながらもがいた。

おれにとっては、モグラをつかまえたのについて、春になって、二度目の収穫だ。

すると、向こうの方から、仲間のサブがかけてきた。サブは、うしろに二、三人の小さなやつらをしたがえている。